

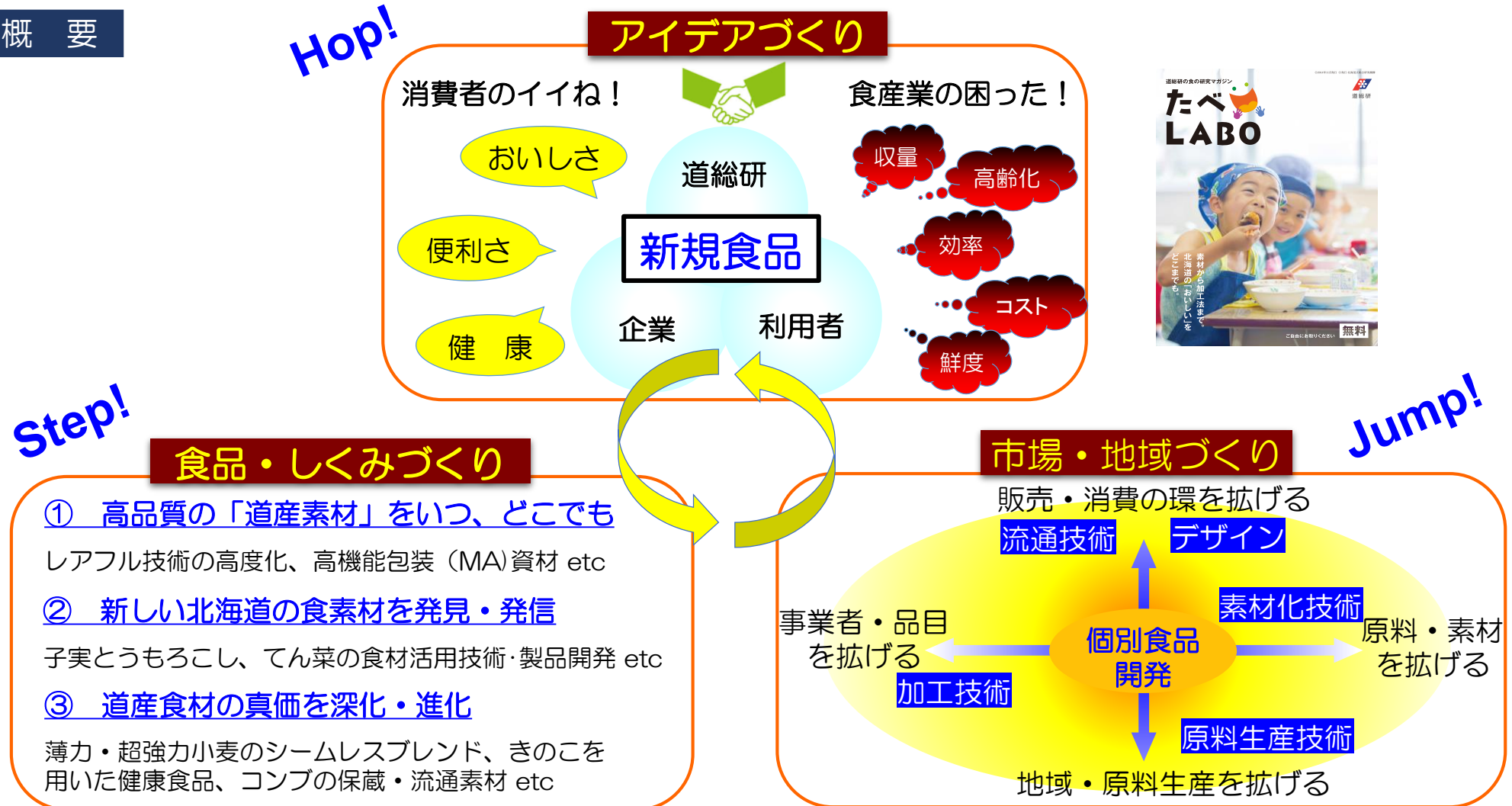
北海道食産業の「困った！」を 技術の融合と連携の力で「強み」に変える新しい仕組みづくり！

～ 戦略研究（食産業）：「素材・加工・流通技術の融合による新たな食の市場創成」 ～

背景

- 北海道の食品産業の付加価値率は27.9%と極めて低く、この克服が最大の課題です。
- 個別食品の開発に留まらない地域経済の核となる**新しい食産業の創出**が求められています。

概要



北海道の「困った」を克服する新たな輸送技術の開発

<本州送りブロッコリーの輸送コストが高すぎて困った！>

【MA包装資材※1による低コスト輸送実証】



道産ブロッコリー

道外移出額：64億円

※1 内部の空気組成を制御できる包装資材

現状方式
(水詰め発泡箱包装)



道内4産地から

- 【製品の外観】 **良好!**
- 【成分・食味】 **良好!**
- 【輸送コスト】 **半減!**
- 【廃棄物】 **軽減!**

MA包装方式



道内JA、ホクレンが導入予定!

府県消費地へ

期待される効果

- 輸送コストの大幅低減によって道産野菜の競争力が向上
- スイートコーンやアスパラガスでも活用が期待

「困った!」を「強み」に変える地域産業づくり

<道産果実の消費が落ち込み売れる加工品がなくて困った!>

【レアフルによる地域果実加工産業の拡大】

生果実に近い食感
果実本来の味・香り

×

シロップ・添加物一切不要
6ヶ月以上保存可能

産地・事業者
拡大

- ・長沼町
- ・由仁町
- ・七飯町
- 他

レアフル技術



原料・素材
拡大

- ・りんご
 - ・洋なし
 - ・フルーツマト
 - 他
- (赤字は試作中)

用途拡大

個食パック



菓子素材



スイーツ



- 産地の特徴を活かした果実製品の開発が拡大
- レアフル加工を前提とした省力・低コストな栽培技術が広がり、果実生産が拡大

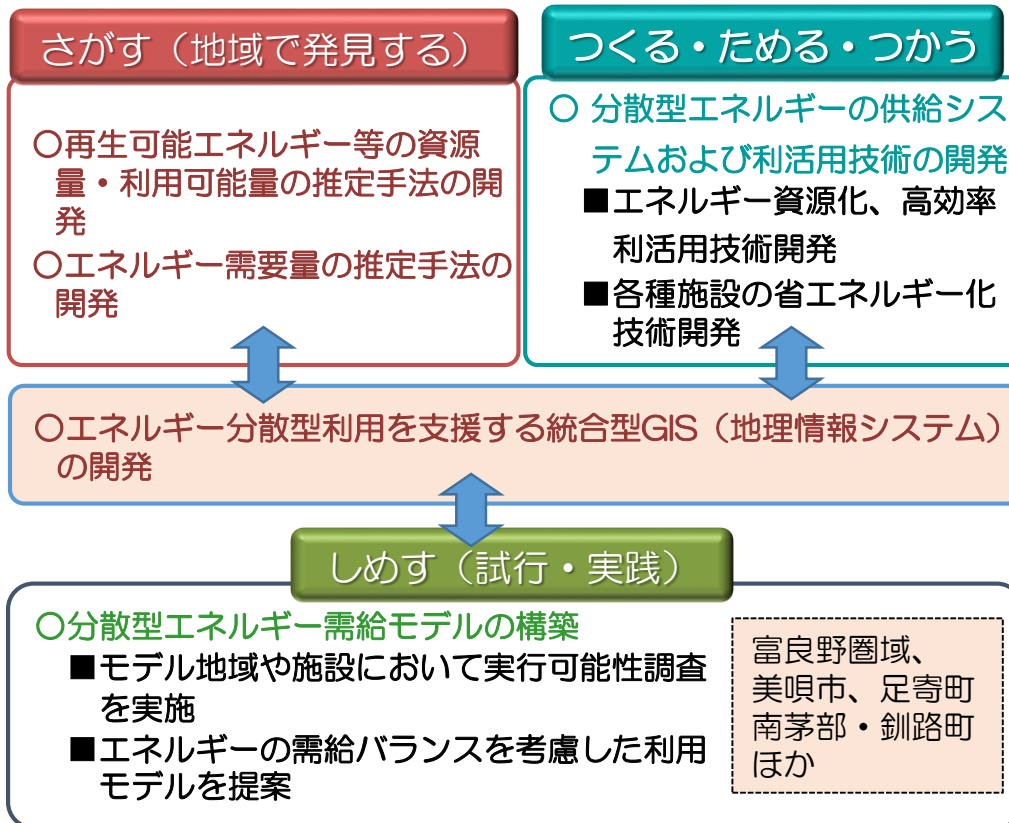
各地域の特性に合わせたエネルギー利用モデルを考える

地域におけるエネルギーのベストミックスとは？

背景

- 北海道内には、太陽光や風力等の自然エネルギーや、燃料として活用可能な廃棄物等が豊富にあります。現在はそれらを十分に有効活用できていません。
- 道内の各地域でそれらのエネルギーを効果的に活用するためには、各地域の実情に応じたベストミックスを実現しうるエネルギー利用モデルが必要です。

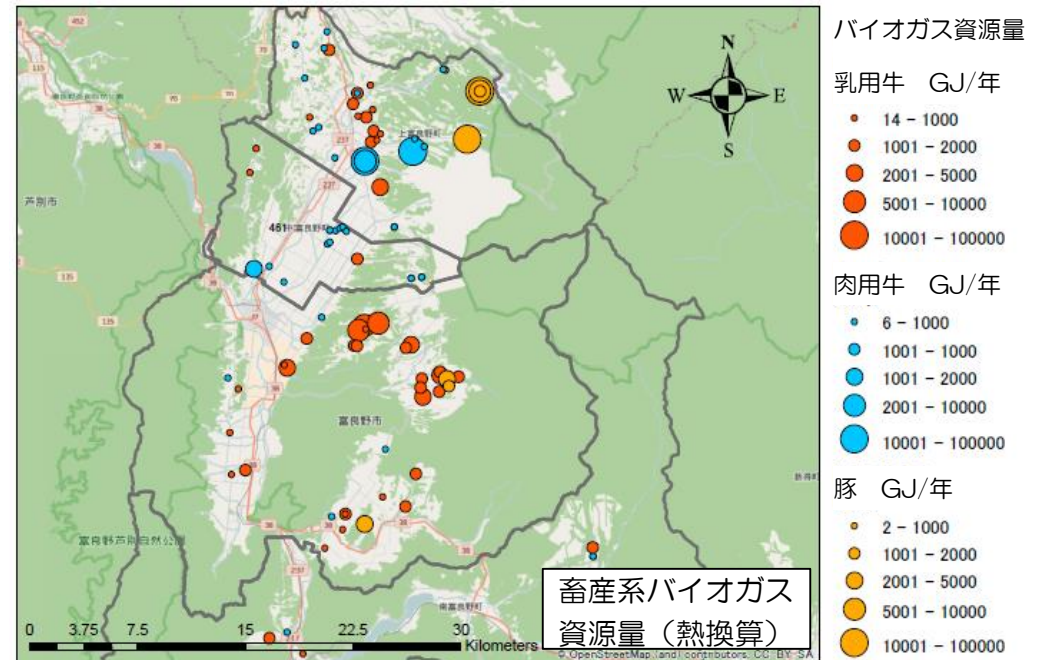
概要



成果

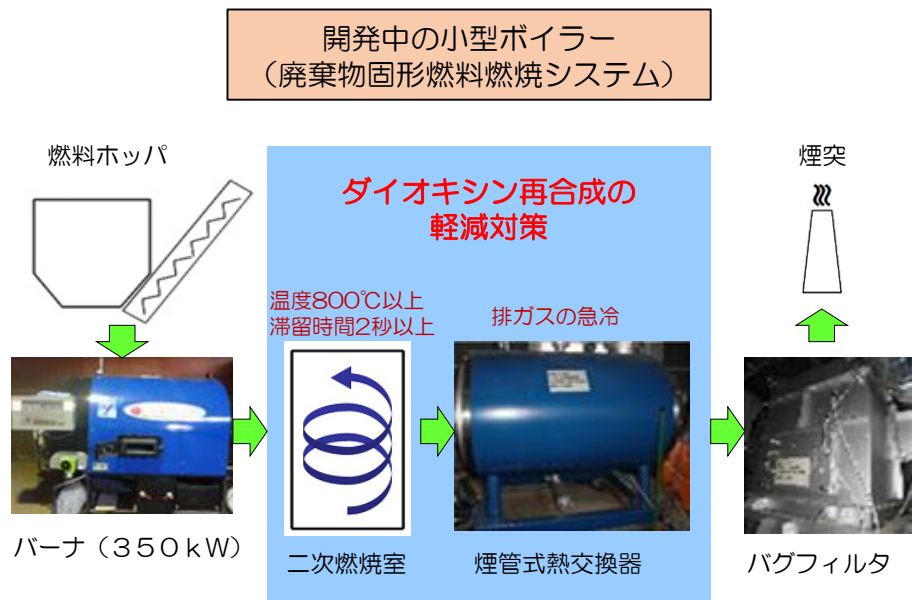
1 (さがす) 再生可能エネルギー資源量の推計

富良野圏域におけるふん尿発生位置の調査から、バイオガス資源量を推計し“見える化”を行いました。



2 (つくる) 地域で利用可能なエネルギー利用技術の開発

地域から発生するゴミを燃料とする小型で環境に優しい(ダイオキシンの発生が少ない)ボイラーを開発しています。

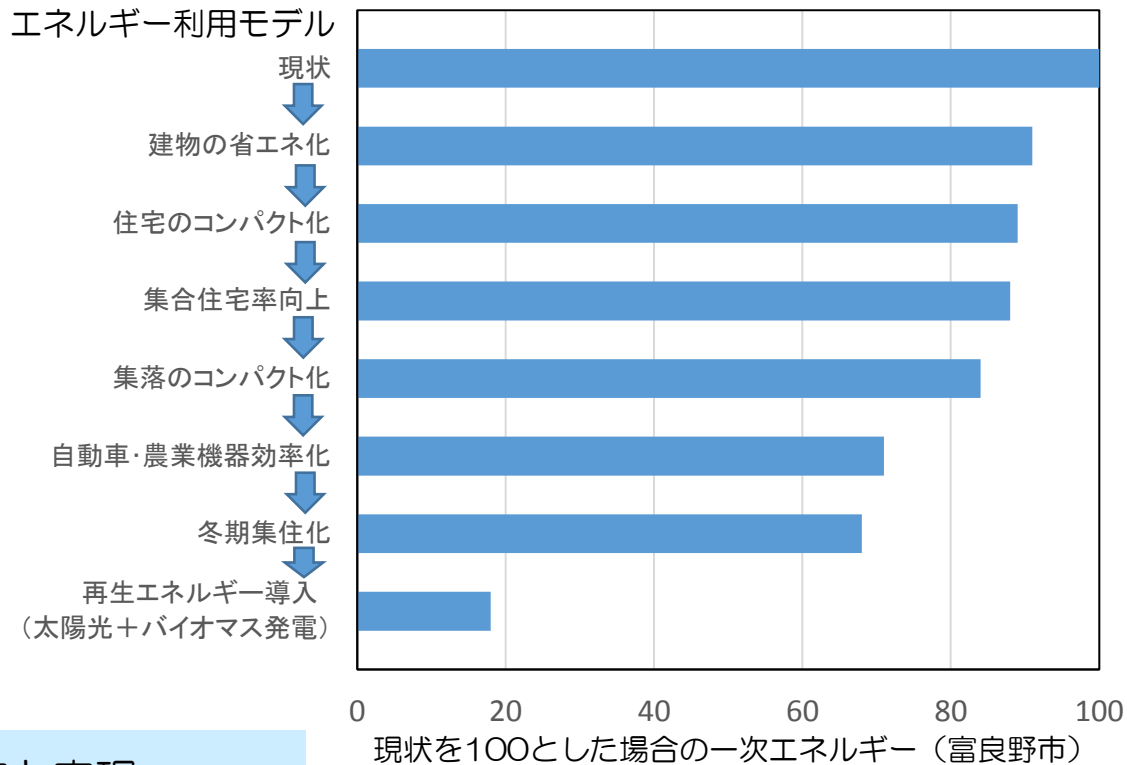


期待される効果

- 自治体による地域エネルギービジョンの策定と実現
- 企業等の地域エネルギー産業への活用
- 地域における新たな産業創生と雇用創出

3 (しめす) モデル地域におけるエネルギー利用モデル

現状の地域のエネルギー収支を基にして、いくつかのエネルギー利用モデルを想定した一次エネルギーの収支を試算しました。



農業・生活・地域の新たな拠点づくりとは

～ 農村集落での集住化と拠点整備手法の構築 ～

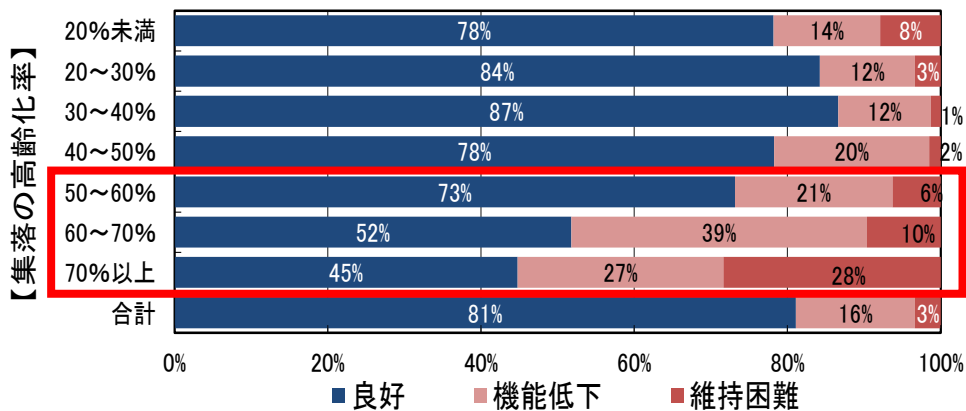
背景

- 農村集落では地域産業が衰退し、雇用不足に困っています。
- 急激な人口減少や超高齢化のため、農村集落の生活利便性は低下し、地域コミュニティも衰退しています。
- 水道、除雪などのインフラ維持管理も負担が増大しています。
- 生活環境の向上と産業振興を同時に実現する手段として、農村集落での「集住化」の取り組みが期待されています。

農村集落の現状は？

- 近年、100人以下の集落が急増 (2019集落)
- 住民の40%以上が高齢者である集落は1281集落
- 超高齢集落では集落機能が低下し、維持が困難

高齢化率別の集落維持状況
 (北海道集落实態調査 n=3,757)



新たな農村集落像とは？

①インフラ再編や
 集落ネットワークの構築
 ▶効率的な地域運営
 と生活維持

②地域資源 (人・物・金)
 の活用
 ▶生活サービス
 や産業育成



④新規就業者等の
 増加
 ▶人口減少の緩和

③産業・雇用の創出
 ▶地域経済の活性化

成果

1 集住化ニーズの把握 (アンケート・インタビュー調査)

【すぐ入居したい人は?】

- 新規就農者、後継者世代 (~30代)、高齢者

【将来入居したい人は?】

- 40~60代の現役世代



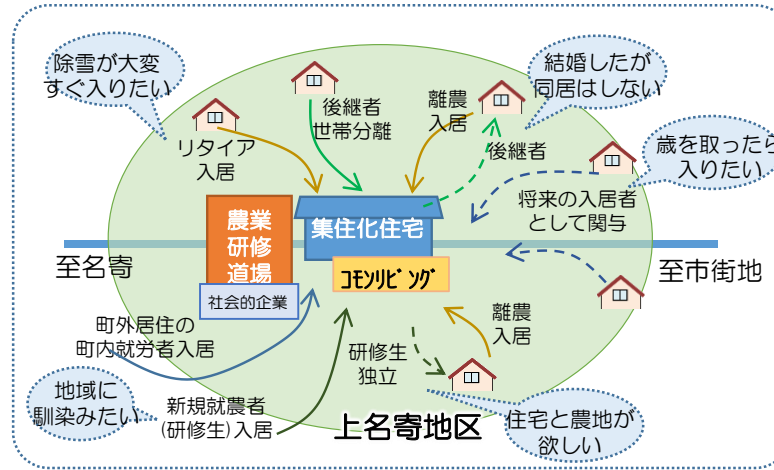
【集住単位・場所は?】

「集落内」で、
「集落単位」で
住みたい

【拠点機能は?】

子育てなどの
相互扶助機能や
食事サービス

2 集落内の住み替えイメージ

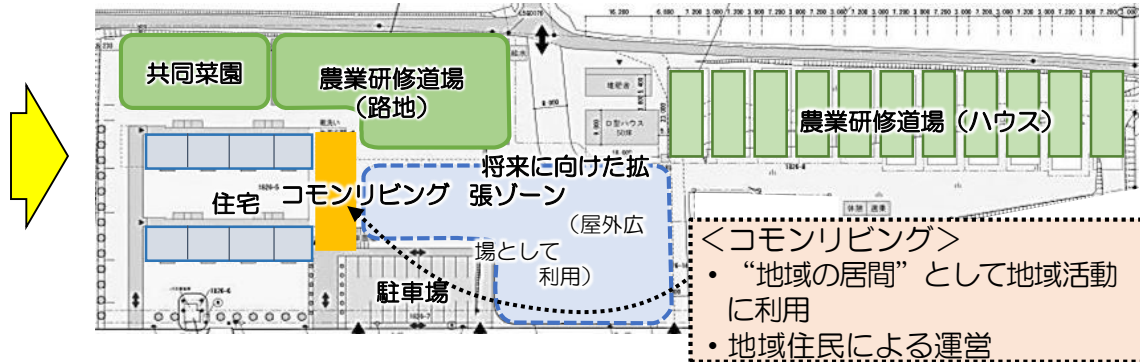


3 拠点整備機能の検討

- 入居希望者と地域住民で検討
- コモンリビングの必要な機能と運営方法などを具体化



4 計画・設計支援



5 集住化と拠点整備手法

集落内の集住化手法を検討

- ニーズ
- 整備機能
- 運営主体

今後、
拠点集落、
市街地で
集住化を
検討

期待される効果

- 新規就農者、後継者の定住
 - 高齢者の流出抑止
 - コミュニティの醸成
 - 地域運営の担い手育成
- 集落の定住促進、集落機能の持続性向上

協力機関：下川町